

---

# 箱庭の調律者

ラヴィエンテ改

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

箱庭の調律者

### 【NZコード】

N6955X

### 【作者名】

ラヴィエンテ改

### 【あらすじ】

通り魔によつて殺された主人公。

彼はどのような人生をおくることになるのか。開発したスキルを引っさげ、今、箱庭に調律者が降り立つ。

更新は不定期の上処女作です。生暖かい目で見守つてやってください。

## 第零話 終わつて始まつ（前書き）

初投稿です。よろしくお願ひします。

## 第零話 終わつと始まつ

「人生つてむ、本当あつけなくて、つまらない。」

自己紹介が遅れたね。俺は首里道人。しゅりのみちと 某々大学に今年から入学するはずだった十八歳。

なんで「はずだった」になつてゐるのかといふと、前方の文でわかると思つが、殺されたんだ。

ん？ 文？ 何言つてんだろ俺。

いやまさか今日日本中を騒がせてる凶悪通り魔事件の被害者になるなんて思わなかつた。

背後からいきなり刃物を突き立てられて殺されるつて聞いてたけど、本当だつたんだなあ……

血を失うにつれて段々五感が失われていく……

あの感覚は一度と経験したくないなマジド。思い出すだけドトラウマになりそうだ。

まあそんな事（オイ）は置いといて

「どうなつてんだこれ？」

そり、俺はわけのわからぬ真つ白な空間にいる。

なんか頭がおかしくなりそうだな……

これが永久に続くのか！？

え？死後の世界ってこんななの…？花畠とか想像してたのに…？いやこの空間あと一回ぐらいいたら絶対発狂する。

「いやーーー時間の概念ないし、本当のあの世ってわけじゃないからな。」

ああそつか。安心した……って

「誰だよー？」

後ろを振り向いてみたが誰もいない。まさかもう発狂して幻聴が聞こえるようになったのか？

「違う！上だよ上！」

上を見ると、ジーンズにポロシャツとラフな格好のダンディーなおっさんが降りてきた。

「一体あんた誰だよ。」

「神さ。」

「まあ死後の世界があるんだし今更神が居ても驚かないけど、何で唯の人人が死んだくらいで出張つてくるんだ？」

「それは僕の部下のミスで間接的に君を殺してしまったからさ。」

うわあよく読んでた一次創作のテンプレだ。マジであつたんだなん?間接的?どういう事だ?

「部下はあの殺人鬼……生前は切り裂きジャックと呼ばれていた男を人間に転生させてしまったんだ。本当はミミズにするはずだったのに。」

あ～なるほど。死因に関わってたわけか。しかし超有名人に殺された事になるな。

「そんな風に考えたのは君が始めてだ。」

神が何やら驚いているようだ。

うん。今更だけど心を読まれている事に関して突っ込むべきか?

……やめとこう。めんどくさい

「彼に殺された人はここに連れてきて転生してもらつことにした。」

はい更にテンプレの重ねがけです。本当にありがとうございました。

「ちなみに二次元の世界に行つてもらつけど……後空いてるところが一つしかない。」

「どこですか?」

「めだかボックスという漫画さ。」

比較的平和そうだし、いいか。

「因みに原作ブレイク大いにやつねやつて構わないよ。」

へえー

「因みに特典は七つね。」

「自分で考えたスキルとかでもござりますか?」

「度を越さなければね。」

「じゃあ一つ田は俺の存在を元の世界から消すこと。二一つ田は家族が幸せに暮らせるようにすること。」

「珍しい若者だね。」

親兄弟には俺のことを忘れて平穏に過ぎてしましからな。

「後四つだよ。」

「三つ田は主人公の同級生として十三組に入れること。四つ田は高一の年齢からスタートさせること。五つ田は性別を変えないこと。」

赤ちゃんプレイや女体化などしまっぴらぐめんだ。

「四つ田と五つ田に関しては心配しなくともこいから残り四つだよ。」

「じゃあ————ってこの感じのスキル下せ。」

「本当欲がないね。チートはこれでやつと一つだよ。」

「後エアギアのレガリアを発明できるようにしてください。それとDグレのティキの能力をお願いします。」

「後一つ。」

「主人公と同じくらいの身体能力と脳。」

「これで全部かな?」

「はい。」

「じゃあ転生わかるよ。」

神が俺の額に指で触れると凄まじい眠気に襲われた。

神の「第一の人生を楽しんでね」という声を聞きながら、俺は意識を失った。

## 第零話 終わりと始まり（後書き）

主人公のスキルは次回の設定で書かれます。  
タイトルから推理してみてください。

## 主人公設定（前書き）

もう見ててくれた人がいることに感動です。  
前回ミスがありました。申し訳ありません  
主人公設定ですが、Dグレネタ多いです、  
……

## 主人公設定

### 主人公設定

名前：首里道人しゅりみちど

身長：173cm

体重：55kg

外見：エアギアの皇枢すめふるきのを男にした感じ。瞳の色は赤。  
（いわゆるアルビノ体质）

年齢：生前は18歳 転生後は16歳

性別：男

異常

### ?「超律」（チューインナップ）

対象に取った相手のあらゆる調子を最盛期レベルまで引き上げるスキル。異常を対象にすれば、かけられた相手は120%自分の異常を使いこなせる。

過負荷に使う際には更にマイナスにするかプラスに転ばせるか選べる。

プラスにされたマイナスは元々の作用とは逆に働くことになる

例)スカーテッド致死武器が他人の生傷を古傷に変えるスキルに変わるなど

また、このスキルの影響で、道人は一度「調律」した相手のスキルの構造を知り、完璧に使いこなすことができる。

? 取捨洗択  
ゲットオアスロウ

Dグレのティキの能力に名前をつけた物。あらゆるものに対しても触れるか触れないかを選択できる。使い方によっては相手を殺害することも可能な危険極まりないスキル。

例) 壁に触ることを「拒絶」してすり抜ける、相手が「生きていること」を拒絶するなど。

備考：「フラスコ」計画に参加しており、「十四番目」と呼ばれることが多い。

験体名「神ノ道化」（クラウン クラウン）

交友関係が極端に狭く、十三組の十三人サードィンバーティーでも知る人は研究を統括している名瀬くらいである。

他の知り合いは「フラスコ」計画関連で黒神真黒、日之影空洞、後は昼寝仲間である太刀洗斬子程度。

基本的に自分に興味があることが無ければ最下層のさらに下にある「十四番目の秘密の部屋」にいる。一（部屋に入るには正しいスペコンに特定のデータが入ったメモリを読み込まなければならず、そのメモリは日之影、真黒の二人しか持っていない。少ない知り合いは大事にする。実はツンデレ。

## 主人公設定（後書き）

こんな駄文を読んで下さつてありがとうございました。  
ではまた次回までさよなら。

**第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅（前書き）**

二話連続投稿です。

## 第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅

首里 side

目を覚ますと、どこかわからない公園のベンチの上だった。

「『知らない天井だ』つていうお約束出来ないじゃん……」

ぶつぶつ言しながら体を起し、染めて隠していたはずの白髪がふわりと顔にかかる。カラー・コンタクトも消えてしまったようだ。高かったのに……

「ま、この世界ならこのまままでいいか。」

そこまで考えて手で取つてを掴んでいたバッグが目に付いた。

開けてみると受験票と完成品の玉璽レガリアとiPhoneと通帳——（〇が十個ほど並んでいる）が入っていた。

iPhoneを開くとメールが一通来ていた。

「えつと……『無事転生できたようで何より。玉璽レガリアは僕からのサービスさ。使いこなせる様にしておいたから反動とかは無いはずだよ。これを見たら不知火袴の所に直接に行つてね。このアドレスは返信も可能だから、やりとりもできるよ。』……便利だな。返信は後にして袴さんの所に行くか。」

すぐそこに箱庭学園があつたので、受験票を見せて通してもいい。地図で理事長室の場所を確認したといつに、たどり着くまで三十分以上歩き続けた。

「はあ、はあ……やつと着いたか。どんだけ広いんだ……失礼します。面接を受けることになつて、いた首里道人です。」

「ああ、どうぞ。」

入ると腹黒いことを考えて、そんな老人が「今失礼なことを考えましたか?」……この人、出来る。

「まさか。そんなわけないでしょう。それより、理事長に呼ばれるところ」とは……何か問題があつたつてことですよね?」

「いやいやまさか。君に問題などありませんよ。ただ、少し老人の実験につきあつていただきたいのです。」

袴総帥はグラスに入つたサイコロを取り出した。

「ここのサイコロを振つてもらひ結構です。自分が異常である」とは自覚していますし、「コントーラブルにしてあります。」……そのアブノーマルを見せてもらえますか?」

「いいですよ。でも……」

俺は立ち上がりカーテンの所まで歩いていく。

「そこで隠れてコソコソしてゐる方々には、退場願いましょつかねえ

!『拒絶』×!-!

衝撃音が響きわたり、隠れていた十三組の十二人は空氣の塊を受け  
て一人残らず失神した。  
サードィンバーティー

「全く、盗み聞きなんて趣味の悪い……」

袴総帥に向き直る。

「話を戻しましょうか。」

結構いい笑顔で言つてやつた

首里 side out

袴 side

十三組の十二人を全員同時に氣絶させた！？  
サー・ティンパー・ティー

一体どのような異常なのです？

「私の異常は『超律』（チュー・ンナップ）と『取捨洗択』（ゲット・オアスロウ）の一いつです。『超律』（チュー・ンナップ）は対象者の異常、体調などを絶好調に調整できる異常です。例えば――」

そして私の首のあたりに触れる。すると、みると肩こりが治つていった。

「『取捨洗択』（ゲットオアスロウ）は、触れる物を選択できる異常です。さつきのはそれを応用して衝撃波を飛ばしたんです。壁をすり抜けたりもできますよ。」

「……素晴らしい。是非フラスコ計画の中核である十三組の十二人サー・ティンパー・ティーに参加してください。」

「構わないですが、いくつか条件があります。まず私がパーティーに参加することは統括者以外には他言無用でお願いします。あ、統括者さんにも口止めしておいてくださいね?一いつ皿まいのセキュリティシステムを呑んでください。」

渡された書類には色々なシステムが書かれていた。後部屋の要望が。

「わかりました。全て呑みましょう。」

「感謝します。十三組に合格したといつていいんですね?」

「はい。」

「では失礼。」

そう言つと彼は出て行きました

いやはや。とんでもない拾い物をしましたね。  
プラスノット計画は大きく躍進するでしょう。

袴 side out

首里 side

びひじてこひくなつた……

今俺は真黒さん(へんたい)に彼の妹、即ちめだかの魅力について延々と講釈を受けている。

「……でねーその時のめだかちゃんの可愛さといつたら言葉にでき

ないほどで……

「もへー度言おひ。じうじうひなつた。

多分めだかの写真を見てにやにやしていた真黒さんにはぶつかってしまったからだろひ。

しかし本当妹レ〇バEな人だな……

名瀬を氣絶させたことがばれたらどんな目に遭うか、想像しただけで寒気がする。

それから延々一時間妹講義をきかされ、俺はすっかり弱ってしまった。

「おい真黒。その辺にじとけ。そいつも困っているだひ。」

振り返ると見上げるような大男が立っていた。

日之影会長ーあんたサイコーだよー

「……分かつたよ。」

不服そうながら引き下がってくれた。

「ありがとうございました。俺は首里道人といいます。

先程箱庭学園への入学が決まりました。」

「面接の帰りだったのか。何組だ?あ、俺は日之影空洞。生徒会長をやってる。」

「十三組です。」

「俺たちもだ。」

「そりなんですか。つと。時間だ。じゃあこれで。」

「ああ。入学おめでとひ。」

「ありがとうございます。」

会場に背を向け、歩き出す。

「いい人だったな。忘れるのはもったいない。よし……」

俺は『田之影空洞を忘れる』こと『拒絶』してからあてがつてもらった寮の部屋に向かった。

## 第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅（後書き）

次回はいよいよ入学式です。

-十三組編まで主人公は介入しません。なので飛ばすかもしだれません。ではまた次回

## 第一箱 チート一人との邂逅（前書き）

性懲りもなく投稿です。  
原作キャラと邂逅します。

## 第一箱 チートー一人との邂逅

首里 side

『世界は平凡か？未来は退屈か？現実は適当か？安心しろ。それでも、生きることは劇的だ！』

『そんなわけで、本田よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み』<sup>（）</sup>があれば迷わず田安箱に投書するがよい』

『24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける！』

…… I のセリフ生で聴くとこんなに迫力あるんだ……

どつも、風の玉璽（レガリヤ）を使おうとしたら地面に頭から墜落した首里道人です。

いやちやんと飛べたんで調子に乗つたら着地に失敗してしまつたんだよ。

かなり痛かった……

で、

今生徒総会の真っ最中です。

キン クリ ゾンて便利だね！

いやしかしこの喧嘩売つてるとしか思えないセリフを堂々と言える事に対しても尊敬の意を示したい。

相当非常識だよ。

容姿もそうだけど。素晴らしい美人だね。真黒さんが自慢するのもわかる。なんとなく。

この数週間の間、箱庭に入り浸つてたから真黒さんや口之影会長と仲良くなつた。後太刀洗選挙管理委員会委員長とも。

オススメの寝寝スポット教えていただいてありがとうございました。

理事長が一（正確には名瀬先輩が）三日で時計台地下十四階を作ってくれたため、今はそこに住み着いている。

いくらなんでも仕事早くね？

他のメンバーにばれないよう、光を透過して幽霊のようにふよふよ浮かびながら部屋まで下つていてる。

もちろん拒絶の扉は華麗にスルーしている。

名瀬先輩に早くかつひそり仕上げてやつたんだから対価をよこせと言わされたので、ニアトレックを一組作つてあげたら結構興奮してた。

分解して鬼気迫るように構造調べてたからな……

閑話休題。

さて、演説も終わったようだし巣に帰ろ。

体育館の天井から飛び降りる。

十三組の所に座らなかつたのは田立ちたくなかったからだ。

風の玉靈使つて天井まで登つてゆつたり見物してたつてわけ。  
レガリア

さすがにあの生徒会長も発見できなかつたせよー

「おこ待て貴様」

「ひわあああつーー?」

「ばれてたのー?…どんだけ田がいこんだよーてかひやんと演説に集中  
しきよー!」

「貴様の髪は田立つからな。後演説中に見つけたわけではない。」

地の文ひつひむなよー。

「それで何の用です?黒神めだか生徒会長?」

「そのローラーブレードは何だ?」

「いれはね<sup>ハ</sup>・<sup>ト</sup>ヒー俺の発明品ですよ。<sup>ハ</sup>・<sup>ト</sup>ク

壁です。俺が考えたんじやなことです。

「どんな機械だ?」

「足を飛べる靴と考えてください。」

「興味深いな。」

「用事はそれだけですか?なら俺もつ帰りますよ。」

「うむ。引き止めて悪かった。しかし今度から総会の時は自分の席に座れ。」

「善処します。それじゃ失礼」

いや～ばれるとは思わなかつたわ。やっぱ超人だな。オーラからして違つし。

さつと帰つて寝るか。

で、

「何故に教室？」

寝た瞬間例の天然チート女がいる教室にいた。

「今何か失礼な事考えなかつたかい？」

「まさか。それよりあんた誰です？」

「おつと、自己紹介<sup>アフノーマルチューンナップ</sup>がまだだつたね。僕は安心院なじみ。僕の事は親しみを込めて安心院さんと呼びなさい。」

「命令口調ですか。で、その安心院さんが何の用です？」

「それは君が欲しいからさ。」

「欲しいのは俺じゃなくて俺のスキルでしょ。」

「ばれてたか。そうだよ。君の異常『超律』<sup>アフノーマルチューンナップ</sup>は素晴らしい異常だよ。

L

「あげませんからね。」

「僕のスキルと交換する気は？」

「ないです。」

「 そうか。もう行つていよいよ」

一 諦めかしいんですね

黒鹿「いやいけない。諦めないよ。」

...「三ノ木」

卷之三

「じゃあもうなら、あまり会いたくないですか。」

「おくれよ。」

そのセリフをバッグに教室から出た。

## 第一箱 チート一人との邂逅（後書き）

marucco様感想ありがと「わい」ました。

PV2000、ニーク400以上と今日始めたばかりだというのに嬉しい限りです。

さて、ここにアンケートを取りたいと思います。

時計台地下の視察のとき、

?ラスボスとして出す

?静観させる

どちらか選んで感想と一緒に投稿していただきたいと思います。

読んで下さってありがとうございました。  
感想をお待ちしています。

### 第三箱 風紀委員会との殺り合い（前書き）

PV30000アクセス、ユニーク500突破です！  
maruco様、投票と感想、ありがとうございました。  
主人公無双です。

## 第三箱 風紀委員会との殺戮

首里 side

「おー一年。校舎の中で何でもんはいていやがる。校則違反だぜ？  
ケケツ！」

……厄介なやつとH�カウンントしきりまつた。

今俺、雲仙冥利に絡まれてます。

校舎をぶらつゝと思つて珍しく外出したのだが、その時つっかり  
石の玉璽レガリアをはじきてしまつたのである。

そこを雲仙に見つかり、今に至る。

「とにかくひとつ来てもらひねつかなあ？ 拒否権はないぜ。」

「……わかりました。」

周りが同情するような顔で見てくる。そんなに嫌われてんのか風紀  
委員会。

ま、やられたつもりなんて全くないけど

はいていたのが石でよかつた。

暫く歩くと教室に着いた。

中には武器を持つた風紀委員の人がぎっしり。

「ま、今日は初犯でことで……全治半年で勘弁してやるよーやれー。  
お前らー！」

各自の得物で攻撃してくる。

でも、全て無駄だ。

首里 side out

side 3人称

風紀委員の攻撃は一全て道人の体をすり抜けた。

『なつ！？』

そしてすり抜けた先には当然仲間がいるわけで

「ぐあつー！」

「あやあー！」

「げふつー！」

必然的に同士討ちになる。

「テメハ……何をしやがった！」

「俺のスキルを使つただけぞ。」

「……<sup>アブノーマル</sup>異常だつたのか！？」

「『』名答。さてこの人たちには行動不能になつてもらいますかね。」

道人は緋翠の道を発動し、次々と風紀委員を『石』にしていく。

「さて、これで邪魔は入りませんね。」

「うつ、舐めんな！」

雲仙はスーパー・ボールの弾幕を見舞うが

「こんなオモチャで俺を倒せるとでも？」

道人は全て掴み取つてしまつた。

雲仙も多少焦り始めた。

（クソ……部下がいるから『灰かぶり（シンデレラ）』は使えねえ……こうなりや『鋼髪の糸』を使う！）

投げられた鋼髪の糸はネット上に展開し、接近してくる道人を阻む  
——予定だつた。

道人は雲仙の想像の斜め上をいつた。

自らネットに突っ込み、その後急ブレーキを掛け糸が緩んだ瞬間隙間からジャンプで脱出したのである。

そして彼の蹴りは雲仙の腹に直撃し、そのまま『石』に変えた。

首里 side

「やつと終わった……」

まさかあれが成功するとは思わなかつた。

あれは生前見た『エア・ギア』で

南樹が鶴に対してもうけていたのを真似たものだ。

「く……そ……」

うわあ凄い形相。

「悪く思わないでくださいよ雲仙先輩。貴方達に正義を執行するだけの力量が無かつたのが悪いんです。まあ、この世に正義なんぞ存在しませんけど。」

「……なんだと?」

とあるダークヒーロー異能漫画の敵役のセリフを借りよう。

「『』の世に正義など存在しない。悪クズの中で最強の者が正義と呼ばれているだけだ……俺の持論です。」

教室を後にする。

生徒会と風紀委員会が全面衝突する一週間前の出来事だった。

## 第三編 風紀委員会との対話（後書き）

アンケートもよろしくお願ひします。

#### 第四箱 本格的な介入前のせせやかなモンストレーション（前書き）

すいません！本当にすいません！

・十三組まで介入させないと書いておきながら……

今回から主人公が前書きに出できます。

首「この見通し大甘なダメ作者が！そんなだからテストも悪いんだろー！」

作「仕方ないだろ気が変わったんだ。あ、蒼井宗仁様、maruc  
o様、感想ありがとうございます！」

首「こんな作者の駄文を見ていただいている皆様には感謝してしま  
きれないです。」

作「扱いひどくねー？」

首「それでは本編をお楽しみくださいー！」

作「無視かよ……」

## 第四箱 本格的な介入前のそれやかなモンストレーション

首里 side

「……暇だ。」

どうも、最近風紀委員会を蹴散らした首里道人です。

風紀委員会が敗北したことほどこからか漏れたらしく、生徒の間ではやり過ぎを見かねた学園が送った刺客の仕業だと、風紀委員会が肅清してきた生徒の怨念が形になつたものにやられたとか言われているらしい。

前者はともかく後者はどこかのオカルトだよ！

……なんにせよ、風紀委員会の格は多少落ちたらしい。

そういうふうに蹴散らしたメンバーの中には鬼瀬、呼子なんかは混ざつてなかつた。

生徒会に関わるからかな？

……考えるネタすら死きた。

うん、寝よう。そうだ。それがいい。

時計塔の屋上でも行つてみようかな？

安心院さんが出できませんよう。  
安心院さんが出できませんよ。

首里 side out

人吉 side

放課後、生徒会室に向かおうとしていた俺に、不知火が話しかけてきた。

「善吉い、今箱庭で噂になつてゐる風紀委員会返り討ち事件でどう思つ？」

「何だそれ？」

「ええ、知らないの！？今かなり噂になつてゐるのに！？」

「教えるよ不知火。」

「教えてください、だろ？」

「……教えてください！」

「よろしく」

「……」こんなやりとり少し前にもあつたよな、確か。

「え、とね、2週間ぐらい前に校舎の中で改造革靴履いてた奴を雲仙委員長が他の委員と一緒にどつかの教室に引つ張りこんで肅清しよつとして返り討ちにあつたつて。保健委員の人人が言つには、全員筋肉がガチガチに硬直して『石』みたいになつてたらしいよ」

「はあ！？何だそのオカルト！そいつがメテューサだつたとでも…？」

「そいつ髪が白くて目も赤かつたつて！風紀委員会に凜清された人たちの怨念だつて説もあるよ あひやひや！」

「ますますオカルトじゅねえか…つと、俺もつ行くわ。」

「情報料として今度なんか奢つてね」

「わかったよ。」

俺は生徒会室へと急いだ。

善吉 side out

めだか side

私は今生徒会室で善吉を待つてゐるのだが……遅いな。

「悪いいめだかちゃん。遅れた！」

丁度來たようだな。

「遅いぞ善吉！たるんでいるのではないか？」

「だから悪かつたつて！」

「阿久根書記も喜界島会計もとつぐに来ているぞ！まあとにかく仕事を始めてくれ。」

「わかつた。」

めだか side out

三人称 side

「そういうやめだかちゃん。」

「ん？」

「十三組に髪が白くて目が赤い奴いないか？そいつ風紀委員会を返り討ちにしたらしいんだけど。」

「……会ったことはある。確かにローラーブレードを履いていたな。A<sup>ニア</sup>・T（トレック）という空を飛ぶための発明らしい。」

「「「ローラーブレードで空を飛ぶうーーー？」」

「ち、ちょっと待ってください。そんなことできるんですか？」

「推測だが4kW程の出力はあった。ちなみに平均的な原付バイクが3 - 5kWの出力だ。」

「何でも作ってるの……」

「カツー、それが十三組ってことなんだらう。」

首里 side

「ハクショーン…うう、誰かが俺の噂してるな……おかげで目が覚めちまつたよ。……ん？」

携帯をチェックするとメールが来ていた。神からだ。

『暫くぶりだね。楽しんでるかい？

一応伝えておく。風紀委員会と生徒会が争うのは今日だ。』

なん…だと…？

やばい！急がないと！

轟の玉璽レガリヤを使って全力疾走する。

二、三分で生徒会室の窓の外に着いた。中の会話が聞こえてくる。

「やめてくだ」

本当ギリギリだ！

何も考えず窓を蹴破つて中に侵入した。

首里 side out

善吉 side

風紀委員長の雲仙が来て、火薬玉をばら撒きやがった！

「……やめてくだ」「遅えよボケ」

爆発による爆風が届いて気を失う瞬間、白い何かが俺たちの前に立ちはだかるのが見えた気がした。

善吉 side out

首里 side

ふ〜危ない。原作介入のチャンスを逃すところだった。

俺がさつき何をしたのかといふと

? 窓を蹴破り割つて侵入

? 善吉、阿久根、喜界島を後ろにかばう

? 轟の玉璽レガリアで一いちに来た爆風を吸收して一丁あがり

「貴様はあの時の……」

「間に合つてよかったですよ生徒会長。ではさようなり。」

「待てーせめて名前をなー自分で探してください。それじゃあ。」

窓から飛び降りて逃げた。

わざと生徒証を落として。

#### 第四箱 本格的な介入前のせせやかなテモнстレーション（後書き）

アンケート、感想ともにいただけすると作者はのたうちまわつてよろ  
こびます。

それではまた次回。

## 第五箱 新しい力と計画の破綻（前書き）

短いです！クオリティも低いです！

後PV200000アクセス、ユニーク3000人突破です！

首「今日はひでえ目に合わせやがつてー食らえ！Trick『CrystaL Sand Wind』」

作「待てー止めてーそれは流石にシャレにならぬ……ギャアアアアアツー！」

（作者は挽肉に成りました）

## 第五箱 新しい力と計画の破綻

首里 s.i.d.e

「え？」

ただいま俺、絶賛困惑中。

あの後屋上で昼寝してたらいつかの真っ白な空間にいた。何を言って（『』）

うん、何コレ？

ちくせう、俺が何をしたっていうんだ！何か！？校舎の崩落に巻き込まれて死んだとかそんなパターンか！？そこはご都合主義がくるもんだろう！？

「いや違つからー頃まだ死んでないからー」

「ナイスツツ」「ミ神様。それで俺をここに招いたわけは？」

「いや最高神に君の転成に関する書類提出したら『このひらのミスで殺しておきながら特典がこれだけか！申し訳ないと思つてるなら少

「あと三つは渡さないとランク下げるって最高神から言われてるんだよ。だからなんでもいいから特典取って。いや選んでくださいお願いします。」

「俺は今の特典で十分なんですが……」

「あと三つは渡さないとランク下げるって最高神から言われてるんだよ。だからなんでもいいから特典取って。いや選んでくださいお願いします。」

そうこうと神は見事なスライディング土下座を決めた。

「ちょ、頭上げてください！分かりました、選ばせていただきますから！」

「よかつた……で、何にする？」

悩むなあ……

「じゃあ重力子の体と同じ様に作り変えてください。」

「重力子の能力もだよね？」

「はい。田十輝もお願ひします。」

「後は？」

「俺の向ひの出生について

・黒神グループが極秘で行っていた実験の生き残り

・生き残りは俺のみ。後は全員『廃棄』された。

つていう設定にじといてください。」

「了解した。」

「後『エア・ギア』『めだかボックス』の原作知識の随時更新をお願いできますか？」

「了解したよ。それじゃ、良い人生を。」

そして俺の視界は暗転した。

田を見ますと青空が広がっていた。

「戻れたみたいだな……そろそろ決着着いたかな？」

『他人からの認識』を拒絶して階下に降りる。

「やめるめだかちゃん。やり過ぎだ。」

あの名シーンキター！

(＊主人公は多少テンションがおかしくなっています)

めだかボックスの中でも屈指の名シーンを生で見れるとは、首里さん感激だよ！

やつをしみじみしていると、いつのまにか雲仙の勧誘のところまで終わっていた。

「ちよ、めだかさんひへー・?」

「病院に決まっておるつ。からだがボロボロだからな……と言ったいところなのだがー」

ゑ!?

俺の方向いてる!?

しまつた氣付かれた!

「あそこ」のあやつを捕獲して事情を聞かないとな!」

「こつなつたらA・Tの全力疾走で逃げる!」

後ろを向いて走り出す俺。

「待て!」

ちよつと!

こつちはA・T置いてんのにめだかさんグイグイ追いついてくるん  
だけど!

何なあの生徒会長!?

「捕まえたあ！」

「あべしつ！？」

盛大にこけた。

「わあ、色々と話してみようか。」

ズルズルと引きずられていく俺

不幸だあああああ！」

俺の叫び声が校舎にこだました

## 第五箱 新しい力と計画の破綻（後書き）

首「作者は前書きで挽肉に成った（した）んで今回は俺が……。  
ンケート、感想よろしくお願いします。」

ア

## 第六箱 策略と魔改造計画の開始（前書き）

前回にもまして短いです。

首「リンク様、ぎくる様、感想ありがとうございます！」

## 第六箱 策略と魔改造計画の開始

首里 side

おはいんにちわ。ただいま、生徒会長に拉致られている首里道人 D e a t h 。

善士ひやん達が怪しいものを見る目で見てくるよ……

ひどくね？俺仮にも命の恩人なんだけど。

認識を拒絶して『知られざる英雄』状態だったはずなのに何で気付かれたんだろう？

「周囲の僅かな変化を見切ったまでだ。」

地の文に一回も突っ込むなよ！

とにかくなにそれこわい。

……あれ？

最初から昔口之影さんを調律した時に入手した『知られざる英雄』使えばよかつたんじやね？

俺ってバカなの？抜けてるの？

……悲しくなつてきた。考えるのはやめよつ。

それよりこの状況をどう乗り切るかだよな……

ここで情が移つたらフラス「計画視察の時本氣でやり合えなくなるかもしね。それはそれでいいのだが、俺は重力子のチートボデクラビティーチルトレンイを持つてるので、今まで勝負にすらならない。

レガリア 玉靈渡してあそこでA・Tの特訓させるか?

先生もいるし、あそこで得た感覚は現実にファードバックするし。

うん、  
決定。

「ちょっと待ってください会長さん。全部話すんで俺の寮の部屋まで来てもらえませんか?」

「……よし、分かつた。」

「ちよ、めだかちゃんー?」こんな壁にこわいの部屋に行へぬかー?」

心が折れそうだよ！

「無論貴様らも来るのだぞ？拒否権はない。」

「えええ！？」

いじけて罪悪感を煽つてみるかな……（悪い笑み）

「ただ窓の外から侵入して爆風を防いであげただけなのになにその

反應

「　「　「はあーー?」」

またハモつてゐるし。

「 本当の事だぞ?」

「別に気まぐれだつたし感謝なんて求めないけど敵意を向けられるのは流石に嫌ですね。」

「い、いや悪かった。」

善吉ちやん慌てふためいてゐる……面白え（悪笑）

で、

ウチに着きました。

生徒会メンバーがソファでそわそわしてゐる。（黒神以外）

紅茶でも出しつくか。

「それで聞きたい事つて?」

紅茶を並べながら聞く。

「 まず貴様の名前からだ。」

「 首里道人。 一年。」

「 良い名だな。 では首里同級生、なぜ私達を助けた?」

「空中散歩中にたまたま田に入ったから。」

「それが例の発明品でやつの力か?」

善吉がやんの質問。

「その通り……っても誰も聞いてないが。」

全員寝てるしね。紅茶に混せた睡眠薬で。

「よつと。重いな。」

一気に抱え上げ、パソコンのある部屋まで移動する。

俺のパソコンには六つほど電極付きのヘルメットがくつついている。

そのうち四つに生徒会役員達の頭を入れ、パソコンのメモリの殆どを占めるあるプログラムを立ち上げる。

さて、俺も入りますか。

都市型プログラム、『ロン・ホーツ・ボーン・街』<sup>ガイ</sup>に。

## 第六箱 策略と魔改造計画の開始（後書き）

アンケートと感想を下せこー！お願こします！

## 第七箱 調律と気苦労（前書き）

作「一週間も空けてしまい、すみませんでした！実力試験だつたんです！」

首「全然出来なくて半泣きだつたくせに。」

作「俺が悪いんじゃないやい！あんなレベルに設定する学校側がかしいんだい！」

首「開き直りやがった！」

作「とにかく今日から再開です！marucco様、紅シルク様、ぼるてつかー様、感想ありがとうございました。」

首「反省しろやー。」

## 第七箱 調律と氣苦労

首里 side

いや何とか作戦成功！

皆にA・Tを体験してもらつてテンションを上げさせ、論點をいつでもやにして帰つもらつた。

善吉ちゃんに荊と牙を見せたら、案の定「デビルかつけえー・反骨精神の塊みてーだ！」

いや確かにかつこいいのは認めるけども、反骨精神の塊ではないよ？牙には少しばかり混ざってるかもしれないけど。

因みに『ロン・ホーツ・ボーン街』には『エア・ギア』原作の「小鳥丸」・「ジエネシス」・「旧・眠りの森」の人々の人格をインストールしてある。

あ、空や宙二ヶの性格は丸くしてある。後キリクは居ない。

俺がキリクのポジにいる。得意なのが大地の道と翡翠の道だから。

後、炎の道フレイムロード  
閃律シャンロードの道が得意である。

他の道も走るが。

話が逸れた。

お見送りしたのち、床に寝そべる。急に眠くなつてきたのを感じる。  
まあ疲れたしね。精神的に。

さて寝よう。

\*

\*

\*

「…………」

「向できて早々。」のポーズを決めてるんだい？」

今のやうとりで分かること思いますが、例の教室です。

ちくしょう油断した！これじゃさりと疲れるじゃないか！

「こつにHンカウントすると寝た氣しねえんだよ！」

「……今度は何の用すか。」

「君に頼みが「だが断るッ！」まだ何も言つてないんだけどーー？」

「絶対めんどくさうだから嫌です！他を当たつて下をこーー！」

「大したことじやない。君の異常を「絶対嫌です。あげません。」  
違つからー少し『調律』してくれれば良いんだよー。」

本編で見たことない焦つた表情が見れた。

「何をですか？」

「異常と過負荷をお願いしたい。」

「俺に死ねと！？ 1京2858兆519億6763万3865個も  
のスキルを全部調律しようと何年かかると思つてんですか！？」

「気に入っているスキルだけで良いよ。何、ほんの56兆3849  
億3209万2745個さ。」

「無理だよー終える前に死ぬわー！」

「やれりと撫でる程度でいいからさ。」

「……どうせやるまで帰してくれないんでしょう。やりますよ。され  
ば良いんでしょ。」

「助かるよ。」

## 計画通り

「はははー油断したなあーーー！ 脳罪証一

「無効脛」

「ぐまあつー？」

しまつた……失敗した……

何で気付かなかつたんだ。この人には無効脛があつたじやないか……

アリバイブロック  
脳罪証明貰つて逃げようと思つたのにー！

「詰めが甘いよ。」

「はい。」もつともです。

必死でノルマを終わらせて開放してもらいました。

\* \* \*

「ひどいあつた……」

頭パンクするかと思つたよ！

「ん？メール？」

こんな展開前にもあつたみな……

え？

M A S A K A

『やあ元氣かい？神だよ。』

時計塔のイベント今日だよ

「せひつぱりといといといといとい……」

なんでこいつタイミング悪いかなー俺に恨みでもあるのか神よーしか  
も俺何日寝てんだよ！

だがしかし！今の俺には**脇罪証明**<sup>アリバイブロック</sup>がある！

「**脇罪証明**！」

こつからほ多少シリアルにいかないとな

そんなことを思いつつ、時計台地十四階—俺の拠点へ飛んだ。

## 第七箱 調律と気苦労（後書き）

さて次回より時計台地下編突入！

ラスボスとして出そうと思いますが、意見はまだ募集集中です。

ひっくり返すかもしれないのによろしくお願いします。

## 第八箱 聞よじ出でし道化師（前書き）

作「いよいよ来ました時計台ー。」

安心院「へえ。今までとかなり違つね。」

作「そりゃそうです……ってなんぞ語らひしゃるんでせうか安心院さん？」

安「何、前回君のせいで散々鬼呼ばわりされたからね。借りを返しに来たのさ。」

作「え？ ちよつ待つて」

安「問答無用。」

作「ギャアアアアアアアアー！……maruco様、口サ様、感想ありが、とう、ござい、ました……ガクッ。」

安「それでは本編をどうぞー。」

第八箱 閻より出でし道化師

時計台地下十四階に着地する。本当に一瞬で移動できた。  
さて、準備を始めるか。

棚から複合玉璽試作機『クリスタルペイン』を手に取る。  
石、牙、荆の三つの玉璽の機能を複合したそれは、かなり刺々しい  
フォルムをしている。

搭載されているそれらを使えば石は「角」、牙は「鷲」、アギト 荊は梨花並の走り  
が可能になる。

ただマシン本体に多大な負担をかけるため、長時間使うと壊れる可能性がある。

A・Tを履き、些細なズレも許さぬよう、契の玉靈レガリアと自らの異常をアノーマル用いて念入りに調律する。

**調律を終え、床に立ち上がる。**

暗がりの中、痛みを訴えし王は独り嘆う。

＊＊＊

「う」みんなで。

呆気ないほど簡単に頭を下げた

おーおい、王になるんじゃなかつたのか？  
いつも簡単に自分のしてあたことを否定するのか？

その程度の志で、フランソワ計画の要?

笑わせるなよ。

他人を傷つけてまで叶えたかったならそつ簡単に諦めるな。  
まあ、いいや。

そこじだけよ。代わってやるから

お前が王なら、俺は道化師。  
キング ジョーカー

最後の切り札として、出張つてやるよ。

\*

\*

\*

スキル『取捨洗沢』ゲットオアスロウを使用し、床をすり抜けて飛び出し、都城王土を蹴り飛ばして床に降り立つ。

打ち所が悪かったのか、気絶してしまった。

その場にいた誰もが驚愕の表情を浮かべているが、気にしない

「何故ここに貴様がいる。首里同級生。」

「さあ?自分で推理してみなよ。得意だろ?」

薄い笑いを顔に貼り付け、はぐらかすように答える。

「……彼が十三組の十二人の最後の一  
サイティーンパー人だからわ。」

結局真黒さんが答えた。

「お久しぶりです。真黒さん。体調はいかがですか?」

調律してからかなり時間が経っている。リズムが狂い始めていてもおかしくない時期だ。

「君のおかげで大丈夫だよ。ありがとう。」

「それは重畠です。まあそんな事より」

古賀の方に歩み寄り、傷口に手を置く。周辺の細胞を調律し、治癒力を引き上げる。

「治癒力を上げたのもう大丈夫です。数日中には歩けるようになりますよ。」

「お前は一体なんのためにここに居るんだよ……」

わけが分からないと言った表情で善吉が呟く。

「『フ拉斯』計画が潰されるのを阻止するため。」

「何で止めようとしゃがる!」

そんな事も分からないのだろうか?

「俺が不利益を被るからだよ。ま、自己紹介から始めようか。」

十三組の十三人の『サーティーンパーティ』十四番田 首里道人です。仲良くなってくれなくて結構です。

フ拉斯計画を止めたいなら、俺を斃してからにしろ。」

「のぞむところだつ！」

「待て善吉くん！迂闊に飛び込むな！彼の攻撃はー」

アドバイスが遅いです。残念でしたね真黒さん？

—Type『荆』無限の空『無限の荆鎖』ター「コイズ・ソニア』

善吉の体に無数の『棘』が当たり、血が吹き出る。

「善吉イイイイイイイ！」

まずは一人。

めだかの叫びをバックに、俺は笑みを浮かべた。

## 第八箱　闇より出でし道化師（後書き）

次回も期待せずに待ちください。  
感想待つてます。

## 第九箱 血戦（前書き）

うなうなです。何書いてんのか自分でも分かりません。  
どうも。

## 第九箱 血戦

……次は誰かな？

喜界島さんが空気を吸い込み始めたな。

音波砲が来るな。

なら……

Type『石』無限の空『無限の地層』グラビト・サフォカーテ

先手を打ち、『振動』で固めた空氣の塊を喜界島さんの前方に落とす。

「な、なんで音が届かないの！？」

甘いな

「訊けば教えてもらひえるとでも？」

「へッ！」

悔しそうだね。まあ一番戦闘に不慣れだつじ。

ん？ いつのまにか腕が掴まれーつて背負い投げ！？

腕折れてるのによく出来るな！

なす術もなく床に叩きつけられ、そのまま腕を固められた。

かなり痛いけど、荊棘の道<sup>スニア ロード</sup>の痛みに比べたらちやちなもんなんだよ！

エア・ギアを知らない読者様のために荊棘の道<sup>スニア ロード</sup>に関する説明をば。

え？メタ発言？気にせずニ。

超人的な過呼吸を行い肺にかかる圧力を高め（4気圧）、通常の4倍もの空気を体内に取り込み、体内に大量に溶け込んだ窒素（この場合の窒素分圧2・4）は、ほんの少しの減圧（息を吐き出すこと）で体中の隙間（背骨も含める各関節）に気泡となり現れるが、この時全身に氣を失う程の激痛が走る。気泡状態の窒素はエアクッションの役割を果し、関節の可動域を限界以上に拡げ、人間とは思えぬ動きを可能にさせる。（Wikpediaより）

説明からも分かるとおり、凄まじい痛みが走る。よって、関節技ごときの痛みでは俺は止まらない。

閑話休題。

「一ふつー。」

足の筋肉のみで強引に体を起こし、無論腕に阿久根先輩を捕まらせたままであるーその体制から彼を思い切り地面に叩きつける。

やっと放してくれたので、そのまま距離を一

「グツ！？」

後ろから後頭部にハイキック！？ってことは一

「……これは驚きだ。」

七割程度だったとはいえ、ソニア ロード インフィニティモスファイア荆棘の道の無限の空をまともに食らって立てるか。

「あの程度で……終われるかよ！」

またキックだ。しかも結構闇雲に蹴つてきやがる。

「一ツ！？」

足元に阿久根先輩！？しまった体制を崩された！

こめかみにキックが入る。めちゃくちゃ痛い。

……舐めやがって。その程度で勝てるつもりかよ。

ホンキヨミセテヤルヨ

『石』の超振動を体に伝え、服と筋肉を硬質化させて『鎧』に変える。

副産物で一人が吹き飛んだ。

逃がすかよ。

空気を固めて飛んでいく善吉を強引にその場に固定する。

「ぐつー……なんで体が動かないんだよー。」

地面から二三歩離れた。

宙二ヶをリスペクトしてあれやるか。

「……空気に振動を伝えて『固めた』からだよ。」

パキパキパキ

氷を踏みしめるように空気を踏み、善吉のところまで行く。

一步進むことに善吉の顔が青ざめる。

ガタガタ震えるし。

「好い加減夢見るのやめる。『詫』程度賭けたぐらいで何でも思い通りにいくなら、ドブネズミだってライオンを殺せるんだよ。」

蹴りを入れる。

ただそれだけでスパコンを壊しながら飛んでいった。

……多少やり過ぎたかな？

「ガアアアアアアアアアアアアツ！」

会長さんが理性無くしたな。

力で強引に『振動』を破りやがった。

こつから全力で行って、どの位持つかな？

きつと今、瞳孔に十字架が浮かんでいるだろ？

そこまでやらないと勝てない。

さあ、始めようか。会長？

会長バケモノと重力子の戦いの火蓋へいきが切つて落とされた。

## 第九箱 血戦（後書き）

次回で決着です。

ところで皆さん、誰にどんなA・Tを使って欲しいとかありますか？  
あれば感想と一緒に送つてくださると嬉しいです。

## 第十箱 血戦の血着と訪問客（前書き）

戦闘シーン難しい！

首「ダメな奴。」

作「ヒドシー? まるでつか一様、感想ありがとうございました。」

ではどうぞー

\* 注　主人公の過去は五箱あたりを見てね！

## 第十箱 血戦の血着と訪問客

髪の色が薄くなり、凄まじい田つきになつためだかが跳躍する

しかし、今の俺の体には、重力子の特殊能力が備わつていてる。

その能力は、「立体把握幹」、「生体羅針盤」と呼ばれており、この二つのスキルを用いて目に見える全ての物体を三次元的に捉え完全に近い精度で相手の次の“アクション”を予測することを可能にしている。

故に回避など造作も無いはずだった。

「ゴホッ！？」

くそっ、アクションを予測できても、体が反応する前に捉えられてしまう！

つかこの威力じゃ『鎧』もそんなに保たない。  
……牙の無限の空ならなんとかできるかもしねりが、あんなもん  
撃つたら会長が挽肉になりかねない。  
どうしたものかね。

飛んでしまつた理性が少々戻つてきたらしく、僅か一本當に僅かだが会長のスピードは落ちてきている。

そして一ようやく隙を見せた。

チャンス！

Trick Bloody fang Ride fall "L  
eviathan"

足から三日月状の巨大な衝撃波を放つ。体を切り裂かないよう、鋭さを加減して撃つ。

一巨大的サメの牙が会長を飲み込むほどの速度で迫る。

避けるかと思ったが直撃した。

反応できなかつたのか？

「――? ガツ！? ガハアッ！」

後ろから殴られた。やべえ、骨がミシミシいってるよ。

分身かよ……

スパコンに突っ込み、寄りかかつて座る形になつた。

そのままつかつかとこちらに向かってきて、拳を振り上げる会長。

あ、死んだな。これ。

転生してからの人生、短かつたな……

すり抜ければいいじゃないかと思った人もいるだろうが、かなり力口リーを消費するので、憔悴しきつた今の状態じゃ無理だ

せめてもの抵抗として腕を上に上げ、振動で硬化させる。

来るべき衝撃に備えて目を瞑り一

「やめろめだかちゃん。やり過ぎだ。」

四人が押さえ込んだ。

「少し落ち着いたらどうだい？理由もなしに攻撃するなんて君らしくもない。」

「……お兄様。いやつは善吉をここまでボロボロにしたのです。許せるわけが「やはり冷静さを失っているね。あんな戦いの後だから無理もないけど。」……」

「めだかちゃん、気づかないかい？彼はさっさから攻撃してきた相手に反撃することしかしていいないよ。」

「」「」「……」「」「」

やつと気付いたか。

善吉相手には多少はやり過ぎたが、他の相手に対しても完全に正当防衛の範疇だろ？。

しかし「はあえて」いつまくとくか。

「……喧嘩を売ったのはこちらです。フランク計画に關して譲る気は無いですが、その点はおけいに非がありました」

「……何故そこまで計画に執着する？」

「……あなたにいつ必要は有りませんし、聞かない方がいいです。  
後悔しますよ？」

神に頼んで作つてもらつたあの過去が理由だ。

あれ、俺の中に実体験として組みこまれているからな……

「『黒神グループ』『重力子』『廃棄』キーワードはこの3つ。後  
は自分たちで調べてください。最も、公にすれば国家転覆の可能性  
もあるから」

「私の家が関係しているとー?」

「正確には君のお父さんです。あ、質問したりしないでください  
ね?俺の命が危ないから」

「どういう意味だー?」

他の連中も割り込んできたな

あんま言いたく無いんだけど…

「人体実験を行つていた証拠なんて、消したいでしょう?ではこれ  
で」

アリバイブロック  
脇罪証明で自分の部屋へ跳ぶ。

いや~過去を話すのって疲れる

\*

\*

\*

後日めだかが家に来た。

データベースにアクセスして眞実を知ったようで、ひどくショックを受け、涙をボロボロこぼしながらじきりに謝っていた。気にしていないとだけ言つておいた。

ついでに真黒さんも来た。泣いてはいなかつたがこちらも謝罪していった。

そして今、また呼び鈴が鳴つた。

「最近訪ねてくる人が多いな……はい、どなたですか？」

ドアを開けると一善吉が立つていた。

「……何か用でも？」

多少警戒しながら問いかける。この間の仕返しに来たのかもしれない。

「

いきなりドアの前で善吉が土下座した。

「図々しこことは分かってるナビ、頼む！俺にこの前使つたみたいなA・Tを作ってくれつ！」

「……は？」

こんな声を出した俺は悪くないと思ひ。

そしてこれが、善吉超魔改造の始まりだった。

## 第十箱 血戦の血着と訪問客（後書き）

次回から原作ブレイクの嵐 and 善吉魔改造ー期待せずお待ちください！

## 第十一箱 特訓（前書き）

作「球磨川あああああああああああああああ死ぬなああああああ！」

首「うるせえよー。」

作「うめん。取り乱した。」

何かエアギアがメインになつてゐる気がする。

キャラ崩壊激しいですがどうぞー。

## 第十一箱 特訓

首里 s.i.d.e

「と、とりあえず頭上げて入ってください。まわりから好奇の目で見られてますから!」

「お、おひ。おじやまします。」

善吉を家に招き入れる。

「……それで? 敵に土下座してまで力を求めよつとあるのはなぜですか? あの後一体何が?」

知っているが。

「……中学時代の敵が転校してきた。」

ぽつぽつと話し始めた善吉。手は膝の上で白くなるほどしづく握られている。

「そいつからめだかちゃんを守りたい。この前まではたとえなにが相手だつて命をかけねばなんとかなると思つてた」

そこまではしゃべつて顔を上げる。

「だけどお前には勝てなかつた。」

「そりゃ俺は異常の中でも別格らしこですしき」

「相手は最悪の過負荷なんだ！お前とは違うべクトルとはいえ、厄介なのは間違いないんだ！」こんどは命を賭けて守りてえんだよー。」

「それでA・Tが欲しい……と？」

「頼むツー！虎とまでは言わねえー・ドブネズミじゃなく、番犬にさえなれば良いんだ！」

……覚悟は本物つてことか。

「本来あれは『空を飛ぶ』ことを楽しむ』をコンセプトにしているんですけどね……生徒会長を守るところのがあなたの選んだ『道』なんですね？」

「あ、ああ。」

少し戸惑っているようだ。いきなりこんなこと訊かれたらだれでも困惑するだろうが。

「……分かりました。協力しましょう。」

「本当か！？」

「たたじ。」  
がばっと顔を上げる善吉。

俺は悪い笑みを浮かべて言つ。

「代金はキッチリカツチリ払つてもらいますよ?三十万円と言つた  
いところですが、初回サービスで半額にしておきましょ!」

### 一瞬の沈黙の後

「高ええええええええええええ!なんだよ十五万円で!」

「八十km／時で走るモーター、高性能なクッショングループ、コン  
ピュータ制御にしては良心的でしょう?原付バイクだつて十万する  
んですよ?」

「いやそれはそつだが!」

「まあいいです。出世払いにしておきますから必ず払つてください  
ね?」

「(え、笑顔が怖い!払わないと内臓売れとか言い出しそうだ!)」

なんか失礼な事を思われた気がする。

「まずあなたの適性を調べますからこっちに来てください。こない  
だの『ロン・ホーツ・ボーン・街』に行きますから。」

\*

\*

\*

「……おれ」

「……なんといふか、うん。ゾンマイ。」

おれになつてこる善吉の肩に手を置く。

現在五つの玉靈を試したが、全部玉碎である。

風の玉靈は暴走させてビルに激突し、

炎の玉靈、石の玉靈は自分が技を浴びてしまい、

雷の玉靈はワイヤーが絡まり使用不能に。

荆の玉靈に至っては発動すら出来なかつた。

契を除いてあと二つしか無いのである。

「諦めるなー後轟と牙が残つてゐー！」

「キャラ違くね！？」

「二つちが素。とりあえず轟履いてみ。」

「……分かつた」

「結構深刻！？」

結局、強靭な脚力が必要不可欠である『轟』に決まつたのだがー

「先生どうしよう……」

『エア・ギア』の作中に轟の玉靈を使える人があんまいないのをす  
っかり忘れてた！

とつあえず轟の道を走るライダーを上げてみよー！

・下ネタ好きの関西人

・男の娘とヘタレのJ.Mコンビ

・ラジカセに玉靈レガリアしこんでるおっさん

これが……絶望か……

アーサーとシャーロットのJ.Mコンビは論外だ。あれはヤバイ。下手すると善吉が変な方向に目覚めてしまつ。

一番人柄的に良さそうなのはドントレスだが、いかんせん使つてるのがラジカセだ。参考にはならんだろう。

と、なると……ヨシヅネに頼むしかないのか。

まあいいか。

大丈夫だろ？。きっと。

\* 轰の玉靈レガリアの説明

ラム・ジェット理論という原理を応用させたもので、前方からの風を圧縮、後方に噴射させることで推進力を生む。押しよせる風が強ければ強いほど、更に加速していく。それが、己への風が強ければ強いほど、その風を自らの力に変えて猛り狂う風車のように思えるため、“風車の力”や“風車の理”と呼ばれる。風の流れを吸収するため、「翼の道」や「血痕の道」の天敵といえる。但し、発動

には玉璽自体が高速運動をしていないといけないためヨシツネの様な凄まじい脚力が必要である。

「牙」や「風」などのエネルギーを圧縮し、ラムジェット機構で空気を高温かつ高圧にして作った“超臨界流体”により、田に見えない「壁」を作り出す。

通常時はフレームがジョットエンジンのような形になつている。

\* \* \*

もぐりみが甘かった……

下ネタ連発しやがつてあの馬鹿！

善吉の顔が引きつってゐじゃねえか！

「生徒にぐりい真面目に接しろやコシツネエヌエヌエヌエヌエヌ！」

「へブツ！？何すんねん大将！」

「やがましい！下ネタ控えろ！胸や下着の話題ばっか出してんじやねえよ！」

「え～彼も健全な男子高校生やし興味あると思つねん。せやから人生の先輩が色々教えてやろうとやな……」

「もつと大事な事を教えるおおおおお！大体生まれて（完成）数ヶ月しか経つてねえのに人生を語るとはほちやんちやらおかしいわアアアアアアアアアアア！」

「それは言わん約束やで。ま、中々素質はあるわ。金の卵つてとこ

やな。すぐ『王』レベルになれるで。」

「やつやよかつた。じゃ、しばらく預けむ」

「了解や。ほな行こか善吉君。女口説きの神體つて奴を教えたる。

」

「いや反省しろやあああああ！」

もうやだ……

\*

\*

\*

体に戻ったのち、『ロン・ホーツ・ボーン・街』の時間の進みかたを30倍にする。

一日で一ヶ月分の修行である。

あいつが師匠なのが果てしなく不安だが仕方あるまい。諦める。

一田経過した。入ってみよう。

どう進化したかな？

「オオオオオッ！轢き潰せ！」

ドカアアアアアアン！

……ええー。

完璧に魔改造されてるよ。ターゲット轟き潰しまくってんじゃねーか。

「おお！大将！どや？中々の仕上がりやろ？多分バトルレベル100はいっとるで？」

「素質の問題か……」

「教え方がよかつたつて話しこはならんの！？」

「3%くらいこは混ざつてるかもな」

「酷いやつー！」

「そんで実戦やらせた？」

「無視かいな……まだや。」

「ちよつじよかつた。相手はもつ決めてる。」

「誰や？」

「今から連絡する。」

電話を掛ける。

『もしもじー何の用ー?』

「ワンホールで出るひーとは賤してるんだな?」

『死ぬほど強いだよー。』

「『キューブ』の試合せしめからすぐ広場まで来い。」

『やこつ強い?』

「歯いたえはあるはずだ。」

『うわあ楽しみだなあー。』

「はしゃぎ過ぎて相手を壊すなよ? ウェルキン……いや、水棲の魔龍?」

『分かつてんつてー。』

通話を切る。

「……水棲の魔龍<sup>オルカ</sup>をぶつけるなんて何を考えとんのや? 大将?」

珍しい。ヨシツネが真剣だ。

「お前の指導だし、相性は良い。大丈夫だろ」

やれやれとばかりにヨシツネは首を振った。

## 第十一箱 特訓（後書き）

次回は善吉 vs 『ジエネシス』の牙の王ウェルキンです！

期待せずお待ちください。

## 第十一箱 努力対天才（前書き）

作「何なんだるう」の時間かけた上クオリティが低下するつて現象。

「

首「だつてお前ダメ人間だし。」

作「ねえ。お前なんでそんなにおれに辛く当たるの？」

首「見てるとイラつくから。」

作「……もう良いよ……フレイム様、marucco様、ぼるてつか  
ー様、感想ありがと「ひ」ざいました。」

首「では本編をどうぞ。」

## 第十一箱 努力対天才

唐突だが、ウェルキン・ゲトリクスは孤独だった。

『エア・ギア』において、彼に釣り合つ実力者はほとんどおらず、大抵の者は戦ふと壊れてしまうのである。

わざとやっているわけではないのに。

故にウェルキンは孤独だった。

常に自分と対等に戦べる者を探していた。

だから首里から連絡が来た時、すつ飛んで來たのである。

\*

\*

\*

首里 side

「せやからまだ早い言つたやろ」

「相手はあの『海の魔龍』オルカ やぞ？一時間粘つただけで、大したもんやと思つけどな～ワイは。」

「アーッ、本当にA・T始めて一ヶ月しか経つてねえんすか？首里さん。そんな素人には見えねえんすけど」

上からヨシツネ、武内空、南樹の順だ。

善吉vsウェルキンの『キューク』（四角い密室内の一対一での

潰し合い。最も過激で最もポピュラーで最も危険な戦）はほぼ決着が付いていた。

壁のほとんどは瓦礫と化しており、その上にボロボロの状態で膝を突く善吉と、多少樂しそうなウェル（＝ウェルキンの渾名）の姿があつた。

今まで殆どが『一方的<sup>ワンサイド</sup>な虐殺<sup>ゲーム</sup>だつたウェル』については、久々の『壊れにくい玩具』であつたためだろう。

一方の善吉は、何度もウェルの『牙』を受け止め、『壁』を打ち返したりしていたのだが、凄まじい勢いで張られた『牙』の弾幕の前にはいたずらに体力を削られるだけであつた。

「ゼンキチ……だつけ？久しづぶりに楽しめたよ！ありがとう！」

年相応の無邪気な笑みを浮かべるウェル。

「ふつ、ざ、けんな……俺は……まだ終わってなんかねえ！」

瓦礫を押しのけて立ち上がる善吉。

「中々に無謀な奴やの。」

「ま、そりゃそうだ。何せー」

「俺だつて……暴風族<sup>ストームライダー</sup>の端くれだッ！」

ドカッ！

轟の推進力を利用した蹴りがウェルに決まる。

「あいつはまだ必死に努力を積んできた人間だからな。」

\* \* \*

「くそっ……なんてザマだよ……」

人吉善吉は慢心していた口を呪つた。

実戦があるとヨシツネから聞かれ、意気込んだまではよかつた。

相手が子供であり、しかもかなりの実力者であるといふことを聞いた時は驚いたが、子供であるなら楽に勝てるだらうと油断したのである。

その結果がこれだ。

圧倒的な『牙』になすすべもなく押し切られた。

何度も『壁』による反撃を試みたものの、いずれも巨大な『牙』に一撃のもとに粉碎された。

不意に、もういいか、という感情が湧き上がる。

じぶんは初心者なのだ。相手に実力とキャリア、共に負けているのだ。

「ゼンキチ……だけ?久しぶりに楽しめたよーありがとー。」

ーーの言葉で、そんな迷いも吹っ飛んだが。

「ふつ、ぜ、けんな……俺は……まだ終わってなんかねえ!」

「ふーまでもこけにされて黙つてはいられない。

まだ始めて一月も経っていない。

しかし、

「俺だつて……ストームライダー暴風族の端くれだッ!」

轟を応用したサバットの蹴りを決めた。

完全に不意をつかれたらしく、綺麗に吹っ飛びウェルキン。

「まだ動けたの?」の一撃で楽に「喋つてる場合かよ?」「え?」

- Trick『Satan Pressure』

比較的小さな壁を重ねるようにして叩きつける技トリックである。以前から分かる通り、善吉オリジナルのものだ。

蹴りで体制を崩していた

ウェルキンに避けられるはずもなく、そのまま押し潰され、瓦礫の中に埋れた。

更に追撃として『壁』を撃つものの、凄まじいまでのジャンプ力

で回避された。

「ホントに供かよ……」

思わずぼやく。『ンクワード塊を跳ね飛ばして出でていくとか。

- Trick『Blood armor over skill  
Gingers Cross』

「もともとこっちがオリジナルなんだよつー。」

先程自分が放った技の牙バージョンが迫る。

しかし、これは恐らく圈。次の本命に備えないとい

ツ！

ウェルキンの背後に**オルカ**鮕が見える。

——これが技影つてやつか。

「これで終わりだよ。無限の空『無限の牢獄』」

しまつたと思った。

何時の間にか周りを牙が取り囲んでいる。

まさしく『檻』。

「閉じる。」

ウェルキンの声が響く。

なすすべもなく、彼の全身は牙に噛み砕かれた。

首里 side

今度こそ終わったな、ありや。

ウェルの牙は水分を爆破せしむことも可能だ。生物中の水分だって例外はない。

それがあんだけ食らって生きてる時点で異常だ。

あいつ本当に普通か？

あ、ウェルが何か言って背を向けた。

大方また遊ぼうともいったんだねー！？

「冗談やろー？ ウェルの牙あんだけ食らってまだ立ち上がるのか んか！？」

空が驚いてるよ。無理ないけど。

「しかもただ立ったわけやあらへん……見てみい。シャドウ技影だしどるわ。

」

ヨシツネも感心してる。じことなく嬉しそうだ。よひやく歸圧としての自覚が出たんだねー！

それはそれとして善吉の技影である。

ハルバード 戦斧ハーブを持ち、黒い甲冑を纏い、背中からは一方通行の「」<sup>アクセラレーター</sup>と黒翼シャドウが伸びた騎士のような技影シャドウ。

何あれ？

デビルデビル言つてゐるから悪魔の技影シャドウだと思つたんだがな。

あれじや悪魔といつか堕天使だ。

しかも尋常じやないフレッシュヤー放つてゐし。具体的には空やイッキが引くべりー。

そして、善吉は血塗れの体に鞭打つて壁登りウォールクライムをしだした。

そして空中に飛び上がり、足を振り上げ

下向きに『キューブ』を行つていた空間を全て押し潰す程の『壁』<sup>』</sup>を放つた。

騎士の戦斧が、鯱を叩き潰した

## 第十一箱 努力対天才（後書き）

一言でも良いので感想を頂けると嬉しいです。

## 第十三箱 同盟と忠告（前書き）

短いです！

首「ぶらっく×4様、ギルダーツ3世様、感想ありがとうございます！」

した！」

それと……

作「P.Vが十万、ユニークが一万五千を突破しました！こんな駄文を見てくださつてありがとうございました！」

では本編をどうぞ！

## 第十三箱 同盟と忠告

首里 side

善吉は、戦いの終了直後にぶつ倒れたため、引きずつて現実の世界リアルに戻った。

因みに善吉とは親友になつた。

その翌日、俺は『ある物』が入ったケースを抱え、生徒会室に向かっていた。

今日は会長が『生徒会戦挙』の宣言をした日である。

球磨川マイナスって実際見ると案外普通に見えた。そんな風に見えるのは俺が過負荷を所持しているからかもしれないが。

生徒会室の前に着くと、善吉の声が聞こえてきた。

「がんばる。箱庭学園の庶務は俺しかいねーって、改めてお前に思わせてやるよ」

「いまでは原作通りだが、こつからは俺がぶつ壊してやる。

助かると知っているとはい、友人が傷つくのをみすみす見殺しにする?『冗談じゃない。』  
欲視力?知らねえよ。こざとなつたら俺が貸してやれる。

そろそろシリアル空気をぶち壊しつつ入りつつ。

「ちわー。三河屋でーす。」

「あらサブちゃんいらつしゃい……って違うーあなた誰?」

いい反応です永遠の幼エターナルロリー「今失礼なこと考えたわね?」……この世界では読心術つて基本スキルなのか?

といふか阿久根先輩、喜界島さん、戦闘体制に入らないで。

「何が目的」「おっ! A・T出来たのか道人!」……え?」

阿久根先輩の言葉はあつさり善吉に遮られた。

「あー出来たぞ。最終調整はこゝでさせてもうつむかじな。スピードとパワー、どっち重視にする?」

「パワーで頼むわ。」

「了解。今から調律する。」

背中に背負つた『契の玉靈レガリコア』を開け、善吉の『音』に合わせて最適な調律を行う。本来何人も必要だが、自らの異常のおかげで一人で『音』の聞き取り、最適な状態のはじき出し、最終調整まで行える。

因みに微調整は五分程で終了する。

「ほれ、出来たぞ。」

完成した善吉専用のA・Tを放り投げる。ヨシヅネの物と殆ど同じ

だが、色は漆黒である。

無論轟の玉靈<sup>レガラント</sup>搭載である。

「うわー、ヒ。投げるなよ！危ねえだろー。」

「んなやわじゃねえよ。」

「ね、ねえ！私と阿久根先輩は全く状況が飲み込めないんだけど！  
何で十三組の十三人だつたあなたがここにいるのー？」

よつやく突っ込んだか。生徒会メンバーじゃ比較的まともな喜界島さん。

「善吉にこいつを届けにきたのと、協力の申し出」

「感謝するぞ首里同級生。」

その日は解散した……が、俺は校舎裏に善吉を呼び出した。

「どうしたんだよ道人？」

「庶務戦に関するアドバイス。すなわち対球磨川先輩の策を授けようと思つて。」

さらりと爆弾を投げる。

「はあ！？なんで初戦に球磨川が出てくるなんて思つんだよー。あいつ向こうの総大将だろー。」

「そこが過負荷の過負荷<sup>マイナス</sup>たる所以だ。最悪を想定して訓練しどけ。それと、相手が降参しても油断するな。重要な事を言いそつな時は間違いなく何か狙つていると思え。」

「……分かった。気をつける。」

「じゃあな。」

背を向けて歩きだす。

「道人。」

一善吉に呼び止められたので、振り向く。

「絶対白星で飾るからな」

「……楽しみにしてる」

あいつはもうこれで大丈夫だ。後は名瀬先輩がなんとかしてくれることはずだ。

さて次は庶務戦当日まで暇だ。過負荷組の襲撃があるから見に行かないけど。

ビデオ置いといて撮るか。

第十三箱 同盟と忠告（後書き）

感想よろしくお願いします。

## 第十四箱 過負荷人形（前書き）

懲りず（に投稿です。ギルダー<sup>ツ</sup>3世様、感想ありがとうございます。

今回、次回はかなりグロくなります。

過負荷の名前は二つ名メーカー参考です。

では、どうぞ。

## 第十四箱 過負荷人形

首里 side

今日は庶務戦当日か。俺も一応赤い生徒会コスチューム（戦拳モード）を貰つた。地味に嬉しいのは秘密だ。

さて、どうしようか。

三人相手にしたつて楽勝で螺子伏せられるので大丈夫だが、もし原作通り『冬眠と脱皮』になつたら世間体とか色々やばくないだろうか。

志布志の服を剥いで着る阿久根先輩……想像しちゃだめだ。うん。

でもやっぱ防がなくちゃいけないと思つ。

で、現在張り込み中。もつちよつとしたら過負荷が一人殴り込みにくるはずだ。

あれ、江迎さん来たつけ？若干つる覚えになつてるな。まあ、いいや。

お、お出ましmidtaiだ。

なんか言つてるみたいだけど聞こえない。

因みに今一階上にいる。A・Tはなしだ。

さて、飛び降りるか。

床をすり抜けでトコ降つる | (落ちる)

「ハベアツー。」

……やつかった。蝶ヶ崎さん踏み潰しあつた。**緊急事態だッ！**  
なんてビデオのプロポーズ魔の台詞が脳内で再生された。俺って末期なんだうか。

「誰だて？」「あんたら惚けてないでさつわと逃げろー戦拳にすり参加出来なくなるぞー」途中で遮るもじやねーよー。」

パンッ！

無効脛使つ忘れだた……やはば抜けてるな俺。

傷の痛みはそれ程でもないけど、開く時の衝撃がばねえ。

「首里ヅー。」

田代彰先輩が来ようとしているが、

「今のあんたらじや勝てないし足でまといだーとひとと逃げて長者原先輩を呼んでくるなりしろー死ぬぞー。」

つこ素が出ひまつたよ。

「クソツー。」

全員逃げたな。<sup>ライフゼロ</sup>無効脛で志布志と江迎のスキルを押さえ込めてよかつた……

「一人で残つて足止めってか?いかにも<sup>プラス</sup>幸福の考えそつなことだぜ。」

何言つてんだこのスケバン?<sup>スカーデッド</sup>致死武器や不慮の<sup>エンカウンタ</sup>事故、<sup>ラフラフレシア</sup>荒廃した腐花

程度で勝てるとも思つてんだろつか。」

「テメエ……」

しまつただだ漏れだつたか。視線で人を殺せる程の殺意を持つて睨んでくるよ。

「ふざけてんのか……?」

おまけに蝶ヶ崎先輩起きちまつたよ。早くも裏モードになつちやつてるよ!

「ふふつ、腐らせぬくしてあげましょつ」

江迎さん、光の消えた田でなこと言わないで。すじく怖いから。

まあいいか。

全員過負荷で杭尽くせばいい。

「「来いよ」「俺の過負荷で杭尽くしてやる」」

安心院から真似た57兆以上のスキルの内、最も最悪な過負荷。<sup>マイナス</sup>

その名は、『アトミックフュイク瞬殺人形』

\* \* \*

惨劇としか言ひようの無い情景である。

志布志は鉄の杭で壁に磔にされ、蝶ヶ崎は鎖骨とあばら骨の間を肩から胸へ上から下に抜けるように杭を通されて立つたまま氣絶しており、江迎は脳を揺さぶられて氣絶している。

一首里はそれらを、無感動に、無表情に、無慈悲に見下ろしていた。

白かった髪は黒く、赤かった瞳は青く変色していた。

わずか十分程の間に起きた出来事である。

過負荷 マイナス アトミックフェイク  
『瞬殺人形』。

簡単に言えば、感情を無くす代わりに戦闘力を大幅に引き上げるスキル。

つまり発動すれば、解除するまで高性能の殺戮人形キリングドールと化す。

その攻撃力は、光化静翔ティーマンジング使用時の日之影空洞を凌駕する。その他他のスキルも重ねがけして使用可能である。

「〔やれやれ〕」「〔んなもんか〕」

これを使用すると口調も考え方も過負荷よりの状態になる。

「〔もうそろそろ庶務戦も終わった頃だらう〕」「とつと地上に

出るか」

志布志と蝶ヶ崎に刺さった杭を引っこ抜き、全員を抱えて時計塔の入り口へと脇罪証明<sup>アリバイブロック</sup>で跳ぶ。外に出て、グラウンドに向かう。原作と違い、人吉は完勝したようだ。

穴の近くまで歩み寄る。報告を受け駆け出そうとしていた会長が、動きを止めた。

「一ツ…？首里……同級生なのか……？」

「〔ああ〕〔俺が〕〔正真正銘首里道人さ〕〔過負荷を発動してゐるけどな〕」

球磨川がこちらを見る。その表情が一瞬で驚愕に染まる。

「『……僕の仲間に』『何をしたのかな？』『首里くん？』」

僅かに声が震えている。キレかけているようだ。仲間思いが出てるな。

「〔やだなあ〕〔球磨川先輩〕〔襲ってきたから倒しだけです〕  
〔これは正当防衛。悪くて過剰防衛です〕」

「だから」

「俺は悪くない」

薄っぺらい笑みを顔に貼り付け、言い放った。

**第十四箱 過負荷人形（後書き）**

善吉 v s 球磨川と過負荷 v s 道人のバトルは次に書きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6955x/>

---

箱庭の調律者

2011年11月9日20時24分発行